



# SPACE No.33

日本臨床心理身体運動学会会報第 33 号 2016 年 2 月 22 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

---

## 日本臨床心理身体運動学会第 18 回大会

高橋幸治（大阪府立大学）

2015 年 12 月 12 日、13 日は、大阪府立大学で、臨心身第 18 回大会が開催されました。多くの先生方に足を運んで頂いたこと、演者、講師の先生方に非常に豊かな語りをして頂いたこと、発表者の方々に興味深い発表を披露して頂いたこと、感謝申し上げます。私は、あのような二日間を過ごせたことをとても嬉しく思っていますし、そこで学んだことの大きさを実感しています。また、大会の準備のプロセスで体験したことも意義深いことでした。

18 回大会を大阪府立大学で担当することが決まったのは、金城学院大学での 16 回大会（2013 年 9 月）中でした。その時点で、私どもの府大関係での学会員は、教員である私、川原稔久先生、橋本朋広先生と OB の太田秀樹さんの 4 名でした。2014 年の春に、府大関係者に私は、学会員になって大会準備を一緒にしませんか、というお誘いをしました。学会の歴史やこれまでの活動内容、規模、大切にしている理念（例えば、事例研究 3 時間を重んじている等）を話したと思います。私どもの府大関係者、というのは、大阪府立大学心理臨床センター（臨床心理士養成訓練のための有料心理面接施設）の大学院修士課程の 1 年生、2 年生、博士課程の院生、修士を修了して非常勤等で働きながら数日心理臨床センターで臨床活動を続けている研修相談員、給与をもらって面接する専門相談員、教員、あと心理臨床センターの所属を離れ働いている OGOB の人達を意味します。幸運なことに、川部哲也先生をはじめ、各年代から幅広く学会入会に申し込んでくれて、大会準備時には、会員が 14 名になっていました。大会プログラムの最後の頁に載っている大会実行委員の方々です。実際の 18 回大会の準備は、2014 年 12 月から始まりました。1 年間かけて準備をし、大会当日は、学会員以外の府大関係者にも誘いの声をかけ、そして協力委員として多くの人が、かけつけて手伝ってくれました。とても有り難く感じています。

1 年がかりの大会実行委員による大会準備の様子は、紙面の関係と私自身の意識化が不十分なために、まだ言葉にすることは難しく感じられます。ただ今回の大阪府立大での大会準備の全体の特徴を一言で述べるならば、「超（スーパー）システム」的な準備であった、と行うことができると思っています。「超（スーパー）システム」とは、

免疫学者の多田富雄が、著書『免疫の意味論』（1993）で、使っている言葉です。それは、脳や中枢などの指示を出す、全体の指揮をとる部分が、身体や全体を管理するシステムや、または目的にかなったプランがあらかじめ用意されていて、状況に応じてプランを実行するようなシステムとは、全く異なったシステムのことです。そうではなく、それぞれの細胞が、自己という場に適応し、外部や内部の変化に従って多様化し、あらたな自己というシステムを作っていく動的なシステムのことです。この概念を多田は、細胞レベルのみならず、人の現実の営みに対しても流動的に用いています。つまり、学会大会の準備という場で考えてみると、中枢からの目的的な指揮に基づいて各人が動くのではなく、各人それぞれが、学会大会を準備する中で、適応し、様々な動きに固有の反応や変化をし、影響を及ぼし合いながら、作っていった、という風に感じられます。

その学会大会準備の底を流れていたのが、大会のテーマであったろう、と思われまます。今回のテーマは、「臨床の創造一個を鍛える」でした。シンポジウムの語り手、聴き手の先生方、ワークショップ講師の先生方には、大会企画を決める段階、一号通信やプログラムの原稿を頂く際などに、お話をしたり、メールでやり取りをさせて頂きました。先生方の発想やお考えや言葉に、勇気や喜びやヒントを頂いたことが印象に残っています。そのようなテーマに関わる諸々のことや思いが、大会準備を支えてくれたのかな、とも思えます。

そして、大会当日のシンポジウムにおいては、山中先生と中島先生からご自身の生き様についての語りを、強烈で多大な熱量とともに放射して頂き、それを受けられた名取先生、仁里先生、前林先生を交えて、新たな知の討議が展開された、圧巻の内容でありました。心理臨床活動をすることや創造することの厳しき、愉しき、孤独、世間というもの、「居心地のいいところに創造は生まれにくい」ということ、個を鍛える、とはやはり「自分だけ」で閉じこもることではなく、他者という個のためのことが自分という個のことでもあるような個と他が流動的に超越可能である様子を意味し、そのことと創造が深く関係している、等々、強烈な余韻を私は今でも味わうことができます。先生方、本当に有難うございました。

私は、大会運営のためシンポジウム以外のプログラムの場に、常時いることができなかつたわけですが、記録を拝見拝聴させて頂いたり、その場にいた方に聴いたりしています。講師の先生方、発表者の先生方、指定討論や座長の役を担って頂いた先生方、ラウンドテーブルディスカッションの先生方、ご来場いただいた先生方、18回大会にお力を貸していただきまして、誠に有難うございました。また、実行委員、協力委員の皆さまも有難うございました。

## 大会参加記

浅野友之（筑波大学大学院）

大阪府立大学にて開催された日本臨床心理身体運動学会第 18 回大会に参加しました。

大会 1 日目の午前は、ワークショップ「生きた実践研究をつくる」（講師：森岡正芳先生）を受講しました。ナラティブアプローチを用いた研究のあり方についての話をお聞きしていく中で、そこでは研究者（あるいは聞き手）が現象とどのようなスタンスで向き合うか、そして関わりの中で生じた現象をどう記述していくのかということが問われていることを強く感じました。また、グループワークを通して“客観的、一般的であることに安心してしまいがち自分”がいることにも気づくことができました。ナラティブ研究を進めていく上で、先生は「自分が『どのような見方をしているか』を絶えず振り返る」ことの重要性をお話されておりましたが、今回のワークショップはまさに自分のものの見方、考え方を振り返る大切な機会となりました。

そして、午後は「臨床の創造-個を鍛える」をテーマとしたシンポジウムを拝聴しました。山中康裕先生、中島登代子先生がこれまで歩んでこられた人生の語りを聞いてみると、なんとも表現し難い大きなエネルギーに圧倒されるような気持ちになりました。そして、数々のエピソードの随所に、独自の道を切り拓くこと、創造的に生きることのヒントが散りばめられていたように思います。中でも、「臨床家としての責任感、自覚、覚悟」や「全力で（クライアントのためを想って）行動すること」についての話が印象に残りました。ここで感じたことを、自分なりにこれからの生き方の中に位置づけられていければと思っています。

大会 2 日目は午前・午後ともに一般研究発表を拝聴しました。一つ目の演題は「遊びの創造性-『人生ゲーム』における共時性と布置-」（発表者：古谷学先生・長岡由紀子先生）でした。『人生ゲーム』への参加者が洞察を深めていく過程において、「偶発的な出来事」や「ゲーム内での役」が重要な役割を果たしているという考察は非常に興味深く、“遊び”の有する可能性を考えさせられる時間となりました。二つ目の演題は「喪失による痛み～語りと記憶～70 代女性との関わり」（発表者：大島希先生）でした。“痛み”とは何か。“痛み”を和らげるために何ができるのか。事例の発表や討論を通して、多くの示唆が得られました。

午後から行われた三つ目の演題は「自閉症と診断された小 6 男児との面接」（発表者：高木紀子先生）でした。治療者の姿勢、そして“自由にして守られた空間”で表現していくことの治療的な意味など、事例から学ぶことがたくさんありました。最後の一般研究発表の演題は「言葉を発しない男子学生との中断事例」（発表者：前田章先生）でした。自分だったらこのような方にどのように関わっていくだろうか？と想像を巡らせるとともに、言葉だけではない“表現”の仕方があることを改めて教えて頂けたような気がします。

今回の学会大会を振り返ってみると、“何となく理解したつもりでいたこと”を再度見つけ直すことが多かったように思います。そのような意味では、今大会のテーマにもある「創造性」が刺激されたのではないかと考えてみたりもします。ともすると“自分の枠”に収まってしまいがち自分ですが、このような刺激を受けつつ今後も精進を続けていきたいと思っています。

## 大会参加印象記

木野徳子（常葉大学大学院修士 2 年）

大阪府立大学の中百舌鳥キャンパスで開催された第 18 回大会。私は 2 回目の大会参加でしたが、正直に言って、申し込みはしんどいです。参加するワークショップや研究発表を、どれか一つ、選ばなくてはならないなんて。全部行きたい！参加前からこんな苦渋の決断を迫られるのも「個を鍛える」の一端なのかしら……?!などと、支離滅裂な決断回避の泣き言をひとしきり。迷いに迷って選び、ようやく申し来みました。

そして 2015 年 12 月 12 日、土曜日。強風を伴った低気圧が列島を抜けた翌朝の大阪の街は、柔らかな陽光で迎えてくれました。朝早くから道案内に立ってくださった方々のおかげで、迷わず会場へ。

初日午前には岸本寛史先生のワークショップ「症状や出来事、流れの創造的な読み」に参加しました。切れ味鋭いのに終始穏やかで温かな岸本先生の語りに聴き入りました。事例検討では、春の陽だまりのようなセラピストのお人柄と、それがそのままレジュメになったような事例の経過に、とても温かな気持ちになりました。初日午後のシンポジウム「語らい 臨床の想像—個を鍛える」では、山中康裕先生と中島登代子先生の遠慮ない掛け合いに何度も吹き出し、また壇上の先生方のエネルギーに圧倒されました。舞台の背景としてしつらえられた書棚も、とても魅力的で、休憩時間に間近で見させていただきました。

初日夜の懇親会「市場」。“出店”された方々の「好きなもの」が並んだ会場は、縁日の門前通りのよう。スネアドラムを叩いてみたり、大好きな漫画を見つけてはしゃいだり、クイズに挑戦したり（これは翌日の結果発表で同点 2 位の 4 人入り。やった!）、心躍るひと時でした。高橋幸治先生が十津川と美山川で撮られたという写真は、きりりと冷たい水の温度や、ヤマメが跳ねる躍動まで手に伝わってくるよう。橋本朋宏先生が福島県の檜枝岐川と舟岐川で撮られた写真には、「(魚たちは)ただ無心に生きていた」の言葉が添えられ、3.11 後の当地を慮られるまなざしに胸打たれました。

2 日目午前は廣瀬幸市先生・森岡正芳先生・佐藤徳先生（司会と指定討論：中間玲子先生）のラウンドテーブル・ディスカッション「見える身体／見えない身体」に参加。先生方のお話は、私には難しい部分もたくさんあったのですが、以前から素人の横好きで興味を持っている「ミクロとマクロの境界」というテーマと関連が深いように思えて、かじりつくように聴き入りました。2 日目午後は仁里文美先生（座長：本間正行先生、指定討論者：中島登代子先生・名取琢自先生）の事例研究発表「生きられる場所を探して」を聴かせていただきました。事例の経過に圧倒されて、言葉が出てきませんでした。今振り返ると、静まり返った部屋のその静けさが、そっとそっとケースを包もうとしていたようにも思え、学会会場というものがこれほどのやさしさをもちうるのかと、改めて、厳かな心もちになっております。そのやさしさは、仁里先生のお人柄と姿勢に呼び起され、共振して、あの場に生じてきたものであったと思います。

この2日の間に私が抱いたイメージは「海流」でした。海上は穏やか。海風がさらさらと水面をなでて、時々刻々、さざ波をつくってゆく。けれどもその下では、深海まで幾層にもわたって、何本もの潮流が行き交っているのです。あるものは滔々と流れる大河のように。あるものは渓谷を縫う急流のように。また別の場所では、海中の渦流となって。大会会場に身を置いていると、ふと、そんなイメージが浮かんできたのでした。

私の中に生じた海流は、まだまだ流れつづけています。このような大会に参加させていただき、実行委員長の高橋先生はじめ、運営に携わられた方々に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 編集後記

SPACE 第 33 号をお届けします。本号では大阪府立大学で開催された第 18 回学会大会について大会実行委員長の高橋先生と、参加された院生の筑波大学・浅野君と常葉大学・木野さんを書いていただきました。回を重ねるたびにますます本学会の重要性が感じられ、その感は今回の大会でより一層感じさせられました。学会のさらなる発展を願うところです。来年の学会大会は筑波大学で開催されます。講演、シンポジウム、研究発表と盛りだくさんのプログラムがあり、期待したいと思っています。

会報は、会員相互の利益になるような情報等を掲載していと思っています。会員の皆さまからの投稿をお待ちしています。(鈴木)

<p><b>SPACE      No. 33</b></p> <p><b>日本臨床心理身体運動学会    会報第 33 号</b></p> <p><b>2016 年 2 月 22 日発行</b></p> <p><b>日本臨床心理身体運動学会</b></p> <p><b>会    長    山中康裕</b></p> <p><b>編集責任   鈴木   壯</b></p> <p><b>事務局   〒541-0047</b></p> <p><b>大阪市中央区淡路町 4-3-6    (有) 新元社内</b></p> <p><b>TEL : 06-6221-2600</b></p> <p><b>FAX : 06-6221-2611</b></p> <p><b>E-mail : office@rinsinsin.jp</b></p>
---